

フィロソフィア - 6

期末試験、ご苦労様。定期試験のときはクラブもなしで、勉強時間が十分とれるように配慮されていますが、そんなときにきっちり勉強できるなら、受験勉強の態勢に入ったときも大丈夫でしょう。

さて、前回西欧の中世前期に繰り広げられた「普遍論争」について触れましたが、今回はそれがいったいどういうものであったかをお話しします。今日の話は、一筋縄ではいきません。頭が痛くなるかも知れませんが、とあらかじめ言っておきます。

私の授業はアリストテレスの途中で中断していますので、その先の話となるのですが、このアリストテレスの書物は実は後世に十分伝えられませんでした。その間の消息についてはまた授業で説明します。ただ、アリストテレスの作品が中世ヨーロッパにまったく知られなかったのではなく、論理学関係のものは知られていました。論理学とは、どうやって推論を間違わずに進めて行くか、というような人の頭の中に生まれる概念についての学問です。三段論法はその中心的なテーマでしたね。

昔は勉強をするというと、何よりもまず偉大な先人の本を読むことでした。だからクラスのことをレクチャー（講読）と言った。古代以降、アリストテレスやプラトンの本はとても尊敬されて、たくさんの人から注釈をつけられました。東洋でも孔子や孟子の著作に多くの人が注をつけています。そうすると今度はそれらの注釈がまた教科書になって広く読まれることになります。

さて、普遍論争とは、この世には、例えば目に見える太郎や次郎などの具体的な人間以外に、「人間」という種や、あるいは動物という類が存在するか、という問題です。こういって「なんやそんなしょうもない問題に関わる暇なんかない」と鼻で笑うかも知れません。しかし、この問題は、「この世界には目に見えるものしか存在しないのか、それとも目に見えない存在があるのか」、あるいは今まで何度も言ってきたように、「私たちが目に見る世界は変化するものばかりだが、その変化する世界の裏に何か変化しないものがあるのか」という哲学の中心テーマに関わる重要な問題なのです。

紀元後3世紀のこと、ポルフェリウスという人がアリストテレスの論理学の本を注釈して、こう言い残しました。「いまのところ、私は類と種について、それらが本当に存在するかどうか、それともそれは単に精神のうちにだけ存在するのかという問題、またそれらが本当に存在するとして、ではそれらは物的であるのか非物的であるのか、(中略) について述べることを差し控えておこう。この問題は最も深遠にして、難解な問題であり、きわめて独特かつ念入りな研究を必要とするものである」と。つまり、「普遍についての問題は簡単ではないぞ」と注意したわけです。

この後、6世紀にボエチウスという人がでます。この人こそアリストテレスの書物の一部をラテン語に訳した人なのですが、この問題にも言及しました。「ポルフェリウスが沈黙を守ると約束しているこれらの問題(つまり普遍の問題)は、きわめて有用かつ不可思議であって、聡明な人々によっていくたびか試みられてきたにも関わらず、多くの人々にとっては未解決のままであった」と。

普遍問題は、いわば「禁断の問題」だったのです。賢い人たちは、「この問題には手を触れるべからず」と注意をしていたわけです。その後ローマ帝国が崩壊し、文化のレベルがと急激に下がったことも手伝って、この問題は手つかずで残されました。しかし、1000年頃から西洋世界は再び息を吹き返してきます。そうして勉強も盛んになってきました。ここに天才的な学者が現れました。その名はピエール・アベラール(1079~1142)。彼は当時知られていたアリストテレスの論理学にとっても感動して、論理学さえ極めればすべての問題は解決できると信じていました。そこで、この禁断の問題に、自信満々に挑戦したのです。

もう一度、先ほどの例を挙げます。太郎は人間で次郎も人間ですが、太郎と次郎は別々の人物です。

なら、どうしても人間と言えるのですか、となります。もしプラトンの考えに従うなら、この問題は「それは太郎も次郎も人間のアイデアを分かち持っているからや」となります。しかし、アベラールは、「そのような人間のアイデアのようなものは存在しない。存在するものは、個別的なこの人間とあの人間だけや」と主張します。でもそれなら「人間という言葉は何か」という質問がでできます。アベラールの先生にコンピエーヌのロスラン（1050~1120 頃）という人がいて、この先生は「『人間』っちゅう言葉は、単に『ニンゲン』という言葉が発音するときに出る空気の振動に過ぎへんのや」と言っていました（これを唯名論という）。

でもアベラールという生徒はこの説明のおかしなところにすぐに気がつきました（こういう賢い生徒をもつ先生はかわいそう）。「確かに人間とは『ニンゲン』と発音することで生まれるけど、それは単なる音にすぎないのとは言い過ぎや。我々が言葉を発音するとき、音を出しとるだけと違くて、何か意味のあることを言うのとちやいまっか」と言うのです。これはその通りです。「アングカボン」と言ったとしたら、それは単に音を出しただけ。しかし、言葉を話すとき、たとえば「あなたはバカボン」と言ったとしたら、その音の集まりはちゃんとした意味を持っている。

では、「言葉が意味しているものは何か」というのが次に答えねばならない問題です。しかし、この問題を解くのは、論理学には無理なのです。その問題を扱うのが、ものの存在と構造を考える哲学なのです。この哲学関係のアリストテレスの書物（『自然学』、『形而上学』、『靈魂論』）は、13世紀になって初めて西欧世界にもたらされました。つまり、12世紀の人であったアベラールは知るよしもなかったのです。そこで、彼はこの解決不可能な問題を、「こうちゃうか、いやそれはおかしい。それならこうちゃうか、いやそれもおかしい」と様々な角度から答えを出しては、次のそれを自分で退けるとい悲劇的な試みを続け、最後に「論理学は私を余の憎まれものにしてしまった」と嘆いたのです。



この問題を解くためには、ものがどうやってできているか（ものの構成）を研究する必要があるのです。アリストテレスは、前回言いましたように、確かに独立したアイデアは存在しないが、一つ一つのもは「形相」と「質料」からできている。人間は、知性によって、ものの中にある「形相」を知ることができる。その形相を「人」とか「犬」とか言葉にして表すのだ、と言うのです。この場合、形相は、本質や本性や実体とも言い換えることができます。ということは、人の本性や犬の本性というものが存在するが、それは一人一人の人間の中、一匹一匹の犬の中に個別的な仕方存在する、また、の本性を人は知性によって知ることができるのだ、ということになります。（人がどうやって、その形相を知るに至るかはまた授業で説明します）

換言すると、「ニンゲン」という言葉は、単なる音の集合ではなく、各自が持っている「人間の本性」を表している。太郎と次郎は、人間みんなに共通する人間の形相を、それぞれ異なる体（質料）によって、個別化して持っているというわけ。

こうやって13世紀にアリストテレスの哲学関係の著作が知られると、以上のような解決が与えられたのですが、14世紀になると再び「種や類なんかは嘘っぱちのはげや。存在するのはまったく個物だけで、人間は直接個物をつかむことができるんや」（現代の人たちは大部分がこう考えています）という人が出てきました。それがイギリス人のフランシスコ会士ウィリアム・オッカムという人です。この帆との考えは唯名論と呼ばれます。また実際に近代的思想の始まりでもあります。

またの機会にこの人のことを説明したいです。